

巻頭の言葉

『死生学研究』の継続刊行にあたって

東京大学大学院人文社会系研究科教授 島 蘭 進

「死生観」という日本語は一定の歴史をもっており、現代日本人の日常生活にある程度、浸透してもいる。「死生」の語は『論語』に見られ、「生死」は仏教の根本思想に関わるが、「生死観」ではなく「死生観」の方が広く用いられるようになる経緯は複雑だ。一九〇四年に加藤咄堂という著述家が『死生観』という書物を著したのが、この語の初出らしい。儒学の素養をもった武家の出の文才豊かな人物が、仏教や修養に関する著述や講義・講演で身を立てるようになる。その過程で仏教にも通じるような形で武士の生き方を支える思想を明らかにしようとし、「死生観」の語を用いるようになった。

「死生学」の方はもっと新しい用語だ。これは英語の thanatology や death studies に対応する日本語として用いられるようになった。一九七〇年代以降、死にゆく者へ

のケアの学びや近親者を喪った人の集いがわき起こってきた。死が日常生活から遠ざけられていくが、現代人は死から逃げるのではなく、あらためて死に向き合い、その上で生きる姿勢を確かなものにしていくべきではないか。他方、身近な人の死をどう弔い、記憶にとどめるのか。現在の葬送の仕方や墓のあり方にも疑問をもつ人は少なくない。さらにまた、子どもの頃から、「死の準備教育」を行うのが望ましいという考えた方も台頭してきた。「死生学」の語の興隆の背後には、こうした新たな潮流がある。

死生をめぐる問いは人類永遠の問いであるが、二〇世紀も終わりに近づいて、先進国ではこんな学が必要だと感じる人が増えてきた。まずは病院である。病院では人が死んでゆく。だが病院で働く医師も看護師も、人を治療するための知識や技術を習得してはいても、死に行く者に向き合うすべを知らない。そこで従来の病院にはなかった施設を作ろうとする試みが始まった。ホスピスである。キリスト教の土壌から育ってきたホスピスにあたるものを仏教の土壌からも育てようと、ビハーラの運動も広がりつつある。

そんな施設が必要になるのは家庭で死ぬことができないからだ。家族が直接、ケアにあたり、畳の上で死ぬ習慣を回復すればよいという考えもある。もつとものようだが、それでは現代の家族は死に行く人を看取り、見送るすべを知っているだろうか。また、その力があるだろうか。死に行く人をケアし見送るには、実は文化の力が必要なのだ。かつてはそれが親から子へ、子から孫へと伝えられていった。地

域の共同体も家族を支えていた。そこに宗教的な作法や観念が関わる場合も多かった。だが、現代人は、そうした「死生の文化」から遠ざけられていきつつある。私たち皆が、新たに死生と向き合うべきを学び、育てる必要を感じている。

では、なぜ「死の学」とよばずに、「死生学」とよぶのか。そもそも「どう死に向き合うか」という問いは、「どう生きるのか」という問いと切り離せない。私たちは生き物を殺して、その恩恵をこうむって生きている。死者がいてこそ、私たちの生はある。親や祖父母や先祖、あるいは彼らの同時代人たちが築いたものを糧として私たちは生きている。必ず人は死ぬのだから、いつも死に向けて生きている。そのことは実はうつつすらとはあれ、いつも意識している。そして、自分が死んでも新たな生があることを前提としなくては、生きる力はなえてしまうだろう。

生と死はこのように密接にからまりあっている。儒教で「死生」といい、仏教で「生死」というのは、このような生と死の関わり合いを前提としてのことだ。現代人はそれを「いのち」という、もつと感情をこめやすい言葉で表現することもある。「大いなるいのち」という語は、現代宗教のキータームの一つともなった。そこに現代人が見失いつつある知恵を取り戻したいという願いがこめられている。「死生学」はこのような知恵の回復を目指し、「生と死」についての知の探究を多面的に進めていくことを目指している。

二〇〇二年秋に始まった二一世紀COEプログラム「死生学の構築」は二〇〇七年春に終結したが、この間に八冊の『死生学研究』と三冊の *Bulletine of Death and*



Life Studies を刊行することができた。二〇〇七年夏からは二一世紀COEプログラム「死生学の構築」を引き継ぎ、新たにグローバルCOE「死生学の展開と組織化」がスタートした。この二〇〇八年春号、すなわち第九号からは、このグローバルCOE「死生学の展開と組織化」による刊行となる。並行して二〇〇七年春から次世代人文学開発センターに上廣死生学講座も設置され、体制は強化されている。

旧プログラムから新プログラムへの転換にあたっては、拠点形成を直接担う教員メンバーも若手研究者のメンバーも大幅に入れ替わった。死生学の基礎が「構築」されたのを踏まえ、それをさらに「展開」させ「組織化」を進めるというのが、今回の目標である。しかし、目指すところの「死生学」の基本は変わらない。いっそう内容を充実させ、日本における、また世界における長期的な学問分野発展のための土台作りを続けていきたい。